説教20220911出エジプト32：1-14ルカ15：1-10「神の喜びと人間の怒り」

今日の出エジプト記は、若い雄牛の鋳像を金で造って、それを偶像礼拝した、いわゆる金の子牛の箇所で大変有名ですが、私たちはこの個所を何回も読んで黙想を深めて参りたいと願います。と言いますのは、今に至るまで人間がはまってしまう様々な偶像礼拝の有様を、この金の子牛の偶像礼拝によって知ることが出来るからです。

先ず一節、

モーセが山からなかなか下りて来ないのを見て、民がアロンのもとに集まって来て、「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったのか分からないからです」と言」いました。

モーセが山からなかなか降りてこない、と言って民たちはやきもきしてきますが、モーセが山にいた期間は４０日40夜でした。出エジプトの２４章18節にそのように具体的に記してあります。４０日40夜というのは確かに、一ヵ月を過ぎたあたりから、それにしても長いなー、モーセは一体、山で何をしているのだろうといった疑念にかられそうな日数であります。当然のことですが、この期間モーセは山で遊んでいたわけでも無為に過ごしていたわけでもありません。むしろ、主なる神と向き合って、２５章から３１章までに記されている幕屋建設や、祭儀を整えるために、民たちのために力を尽くしていたのでした。２５章から３１章までを読めば、それが大変重要で膨大な内容であることが分かることでしょう。でも山のふもとにいる、民たちにはこの時、山の上で主なる神とモーセとが何をやっているのか見えるわけがなかったのでした。見えないからモーセは何をやっているのか、と言って疑いを懐いてしまうのです。

このように人間の眼差しはか弱く、その視野は狭いのです。それに比べ、主なる神の眼差しは力強く全知全能であり、全てを見通しておられます。

そんなか弱い民たちの目に留まったのが、アロンという人物でした。民たちはアロンの下に集まって言います。「エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったのか分からないからです」これは明らかにアロンの人間的な能力や魅力に目を留めていった言葉です。アロンは、モーセよりも口が達者であり、人の眼から見てスマートな人間であったのかも知れません。ですから、この時民たちは何をやっているか分からないような、モーセという指導者に替えて、このより優れているであろうアロンに指導者となることを要請したのでありました。

あーなんと愚かな民であろうか、とこれを読む私たちは思わされるかも知れませんが、それは私たちがこの金の子牛の出来事を客観的に眺めることが出来るからであって、不安に駆られている当事者の民たちには、そんな余裕はなくて、視野が狭くなっているゆえに、アロンの人間的魅力にすがりつき、「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。」とお願いをしたのでありました。そして、依頼されたアロンの方も、多くの民から頼られれば、悪い思いはしなかったのでしょう、民たちの先頭に立って、若い雄牛の鋳像の作成に取り掛かったのでした。

ここら辺が、この金の子牛の出来事が、偶像崇拝たるゆえんでありましょう。アロンも民たちも主なる神やモーセのことはすっかり忘れてしまっています。忘れてしまったうえで、自分たちがこの様に用意して作り上げた金の子牛の方がよほど確実で、目に見えて、わかり易いと思い始めているのです。

すると彼らは、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」と言った。と４節に記されています。

アロンはこれを見て、その前に祭壇を築き、「明日、主の祭りを行う」と宣言した。と５節に記されています。

この様に民たちと人間的指導者アロンとの間の当意即妙なやり取りによって、彼らの偶像崇拝は深まっていったとみてよいでしょう。

偶像崇拝というのには大別して２種類の偶像崇拝がありまして、一つ目は、バアル神などの異教の神に、主なる神を捨ててついて行く、ということです。そして二つ目が、今日の金の子牛の像を拝むといった偶像崇拝であります。どちらもよろしくないのですけれども、この金の子牛の偶像崇拝の良くない点は、拝んでいる当の本人が、偶像崇拝をしているという自覚がないという点でありましょう。民たちは言います。「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」それに呼応してアロンも言います。「明日、主の祭りを行う」と。これは、この金の子牛を拝む事こそ、まことの主の礼拝であるとの宣言であります。

こんな風に、主なる神もおらず、又、制止する者もいない民の群れは見るからに大変であります。

６節、彼らは次の朝早く起き、焼き尽くす献げ物をささげ、和解の献げ物を供えた。民は座って飲み食いし、立っては戯れた。

ここには礼拝とは名ばかりの、偽りの喜びがあるばかりです。ここには人間的な喜びはあっても神の喜びはなく、やがてその人間的な喜びは、神の怒りに触れて人間的な怒りへと変化することでしょう。

金の子牛の像は、現代社会にはびこる偶像崇拝でいえば、お金であり、恋人であり、国家であり又自分自身であります。本当に拝むべきは主イエスなのに、実際には、お金を拝み、恋人を拝み、国家を拝み、又自分自身を拝んでしまう、という偶像崇拝にはまってしまうことから100％逃れることは、現代に生きる私たちの誰にも出来ることではないでしょう。この様に金の子牛の出来事は、今を生きる私たちの誰しもが体験することだということを私たちは忘れてはならないでしょう。

厳しいお話が続いてしまいましたが、そろそろ、主なる神が、この金の子牛の出来事をどのように見ておられたのかに移りたいと思います。。主なる神が、この民たちが金の子牛を作り始めたのを知ったのは何時でしょうか。それは今日の聖書箇所をよく読めば分かりますが、それは、主なる神が、山の上から全知全能の全てを見通す良い目をもって、事の始まりから、全てをリアルタイムで見ておられたのでした。今日の聖書箇所は、まだ主なる神とモーセとが山の上に二人でいる時に、述べられた記述と会話であります。山の上から、この民たちの偶像崇拝の有様をリアルタイムで見ておられた主なる神は、怒っている、と記されています。９節10節

主は更に、モーセに言われた。「わたしはこの民を見てきたが、実にかたくなな民である。今は、わたしを引き止めるな。わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている。わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする。」

ここで私たちはこの時の主の怒りがどんなであったかに思いを巡らす必要があります。主の怒りは大きく激しいことは確かです。しかし一方で、主の怒りが人間的な、いわば切れるような怒りではないことも確かでありましょう。なぜなら切れる怒りというのは、言葉を選ばず、感情に任せて、場所もわきまえないで吐露されるものであるのに比べ、この時の主の怒りは、モーセに対し言葉を選んで、感情をコントロールしながら、場所を選んで行われた怒りの表現だったからです。いわば、主なる神はモーセの上に怒りの御言葉を置かれたのであります。そしてこの御言葉にはモーセに対する主なる神の試みの部分も含まれています。「わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする。」このように主なる神はモーセを誘います。もしこの御言葉に、モーセがうなずいて「何という幸い、私を大いなる民としてください」と言ったならば、モーセは主なる神から外されたでありましょう。主なる神もなかなかの方でありますが、、４０日40夜、山の上で、主なる神とモーセとは、民たちのために、心を尽くしてきた仲だったので、主なる神の眼に、モーセがそんな無粋な返答をする心配はなかったのでありましょう。主なる神がモーセに望んでいた返答はただ一つ、モーセが民たちのためにとりなして祈ってくれることでした。そしてその期待通りモーセは民たちのために主なる神に執り成し祈ったのでした。12節より

どうか、燃える怒りをやめ、御自分の民にくだす災いを思い直してください。

そうして、モーセのこの執り成しの祈りのおかげで、主なる神は御自身の民にくだす、と告げられた災いを思い直された。のでした。

実に神の怒りのすばらしさと、人間の喜びの浅ましさを思い知らされる金の子牛の出来事でありましたが、これからは、ルカ福音書の聖書箇所を見て参りましょう。

実は、今日のルカ福音書の箇所も、神に背いた罪人を描いているという点で、出エジプト記の金の子牛の箇所と共通点があります。しかし、主イエスはその罪人のことを１ッ匹の見失った羊に喩えて、実に美しく描いています。この聖書箇所から、罪人こそ、ひたすら追い求めて悔い改めさせる、主イエスの限りない愛の美しさに心打たれている方も多くいらっしゃることでしょう。願わくはその美しさを保ったままで語って参りたいと願います。

なぜ、イエス様は、罪人のことをこんなに美しく語れるのでしょうか。なぜイエス様は、罪人と分け隔てなく飲み食いをされるのでしょうか。それは、言ってみれば金の子牛の前で、座って飲み食いし、立っては戯れる民たちと、同じ席に座るということであります。

イエス様がなぜこんなことが出来たかと言いますと、既にイエス様はこの世に来られてこの世の罪に打ち克っておられたからです。

ヨハネ福音書 16章 33節

「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

イエス様が、罪人と同席して罪に染められるということは100％ありません。しかし、ファリサイ派や律法学者たちは違いました。彼らは、罪人たちを見ては、人間的な切れるような怒りを発していたようです。彼らは罪人たちがその罪のゆえに滅ぶことを願っていました。彼らの怒りは表面上は正当化できるかも知れません。しかし、処理しきれない自分の罪に対する恐れから、その罪を、他の人に覆いかぶせているに過ぎないことを主なる神は見通しておられるでしょう。

全ての人は、この世にあって罪人であります（ロマ3：9）。私たちは、それでもこの世の全ての罪人たちと飲んだり食べたりすることを許されています。それは私たちが、イエス様を信じることによって、自分自身も含めた私たちの罪を悔い改める喜びを知らされているからに他なりません。それは、イエス様に倣って、十字架上で罪を打ち砕かれ、復活の命に活かされる希望に生きる喜びであります。ですから、私たちは、どんな時でもモーセのように、隣人に対して主イエスの名によって執り成しの祈りが出来るようにされています。

私たちは、イエス様と共に在ることによって、罪人の群れの中に神の喜びを告げ知らせ、一人の罪人が悔い改めた喜びを、全員と分かち合うことが出来る大いなる喜びに招かれます。この様な、将にリアルタイムで、神の喜びに私たち一人一人を引き入れて下さる、生きた神様である主イエス・キリストに今日も賛美を捧げて参りましょう。

祈り

主よ、私たちは罪に陥っては、悩み苦しみます。しかし御子イエスは、そんなわたしたち一人ひとりを探し出し、悔い改めさせ、完全な癒しと回復、喜びと永遠の命へと導かれようとしています。

どうか、その恵みに感謝し、どのような場所にあっても主イエスの福音の御言葉を、我が身を以って証ししていくことが出来ますように